

幼児期における父母のスキンシップと養育態度との関連

浜崎 隆司¹・森野 美央²・田口 雅徳³

Links between parental “skinship” and attitude toward young children

Takashi Hamazaki¹, Miwo Morino², Masanori Taguchi³

The aim of this study was to examine the structures of parental “skinship” toward their young children (Study 1) and to reveal the relationship between parental “skinship” and attitude (Study 2). In Study 1, questionnaires on “skinship” toward their children were done to the fathers and mothers in 99 families. They were asked to answer independently. In Study 2, questionnaires on “skinship” and attitude (acceptance, rejection) were done to the fathers and mothers in 148 families. The main results were as follows : (1) Factor analysis of parental “skinship” data revealed 2 domains, that is, calm contact and active contact. (2) Fathers did more active contact than mothers did. Mothers did more calm contact than fathers did. (3) The mothers whose husbands did much calm contact toward their children showed more acceptance and less rejection toward the children. These results suggest that parental “skinship” toward young children have influence not only on children but also on the extent of their partners' “skinship” and attitude toward children.

Key Words : Parental “skinship”, Parental attitude, Young children

問題と目的

近年、幼児期の親子のかかわりにおける、父親の役割や重要性が従来よりもきめ細かなレベルで指摘されるようになってきた。例えば、加藤・近藤（2007）は、父子、母子遊びにおける親のかかわり方を類型化して組み合わせ、3歳児の感情統制との関連を検討した結果、子どもの行動やコミュニケーションに応答するかかわりが低く、子どもの自発性を尊重する程度や場面の構造化がうまくいかない遊びを展開する傾向にある父親と親主導で子どもの状況に応じたかかわりが低い母親の子どもは、子どもの自発性を尊重し、子どもの状況にあわせて柔軟に遊びを展開する両親をもつ子どもより、トラブル

時の感情の統制が相対的に低いことを報告している。加藤・近藤（2007）は、この結果をもとに、父親は母親を間接的に支えるばかりではなく、直接的に子どもとかかわり、その自発性を尊重し、状況に合わせて柔軟に対応する必要があるとして、望ましい父親のあり方を具体的に描き出している。

父親の研究が進み、その役割や重要性が具体的なレベルで指摘される一方、我が国において父親が子どもとかかわる時間は極わずかであるという実状も報告されている。平成18年度の社会生活基本調査（総務省統計局、2008）によると、末子が6歳未満の父親の平均育児時間は、一日あたり39分であり、母親の2時間54分に比べると非常に短い。この限られた時間の中で、父親は、どのように子どもとかかわり、関係性を築き、その役割を果たそうとしているのだろうか。

1 鳴門教育大学 幼年発達支援講座
2 尚綱大学短期大学部 幼児教育学科
3 獨協大学 言語文化学科

幼児期の子どもとの関係性を築く一つの方法として、スキンシップがあげられる。塚崎・無藤(2004)は、保育者と3歳児のスキンシップを一年かけて観察し、スキンシップを通して保育者と子どもが関係を築いていくこと、また、両者の身体が直接ふれ合っていないくても、「両者の関係が繋がっている」と子どもに実感させることができれば子どもが安心することを報告している。

スキンシップ (skinship) という言葉は、平井信義氏が我が国へ紹介し(平井, 1976)、子育ての重要な概念として知られる言葉であるが、英語圏では用いられていない。また、この言葉は、明確な定義のないまま使われてきたために、さまざまな意味が付与されている(田中, 1997)。佐野・荻野・鈴木(1994)は、スキンシップという言葉が現代の若い女性や母親たちにどのように受け止められているかを調査し、この言葉が、本来の皮膚 (skin) 関係 (ship) という意味よりも広い意味で用いられ、身体的接触はないが子どもとの心理的交流を求める、心的接触行動(例えば子どもにはたらきかけたり、一緒に何かをしたりする行動)もスキンシップと考えられ、重視されていることを報告している。本研究では、こうした実状をふまえ、スキンシップを、身体が直接ふれ合う身体的接触行動、または身体が直接ふれ合っていないくても、親から子どもにはたらきかけたり、子どもと一緒に何かをしたりすることで「両者の関係が繋がっている」と子どもに実感させることのできる心的接触行動と定義する。

従来、スキンシップを取り上げた研究では、乳児期や母子間のスキンシップを対象としたものが多く、幼児期や父子間のスキンシップを対象としたものは少ない。そのため、幼児期における父母のスキンシップについては、知見の積み上げがなされていない状態である。しかし、山口・山本・春木(2000)によれば、中学生以前に父母から受けたスキンシップの少なさが青年女性の心理的不適応と関連しており、スキンシップは、乳児期以降も重要な要素であることが示唆されている。また、幼児期の子どもに対する父親と母親の養育行動を比較した児玉・水原(1992)では、母親が身の回りの世話や遊びといった養育全般にわたって子どもとの関係を強めている一方で、父親は遊びを通して子どもとの関係を強めていることが示唆されており、父子間においても母子間と同様にスキンシップ

を通じて関係性がつくられている可能性が考えられる。

以上の議論から、本研究では、まず幼児期における父母のスキンシップを捉える尺度を作成し、スキンシップの構造や量について父母比較を行う(調査1)。続く調査2では、調査1で作成した尺度を用いて、スキンシップが日常の養育態度とどのように関連し、また、夫婦間でどのような関係性がみられるかを検討することによって、幼児期になされているスキンシップの様相を明らかにしたい。なお、養育態度については、親の養育態度における基本的な構造のうち、子どもに愛情を伝えやすい態度であるか否かという愛情に関する次元「受容-拒否」(森下, 2000)にかかわる受容的養育態度と積極拒否的養育態度を取り上げる。受容的態度とは、子どものことが好きで、子どもの気持ちや行動をよく理解し、優しく受け入れる態度(森下, 2001)とされるものであり、積極拒否的養育態度とは、子どもに愛情を伝えることができにくい態度であり、具体的には、激しい口調や険しい表情などで接したり、叩いたりといった体罰を加えるなど、積極的であからさまな、子どもに拒否と受け取られやすい態度(品川, 1992)とされるものである。

調査1

方法

調査手続き 徳島県、広島県、山口県内の保育所に通う年中児、年長児の親99組に質問紙調査を行った。質問紙は、父親版、母親版をそれぞれ別の封筒へ入れ、互いに相談しないで回答するよう依頼し、記入後は封をして提出できるようにした。質問紙の配布と回収は、保育所に依頼した。分析においては、父母ともにいずれの質問項目にも欠損値のなかった92組のデータを対象とした。子どもの平均年齢は、4歳10ヶ月(4.0-6.2; 男児50名、女児42名)であった。

質問項目 幼児期のスキンシップ項目を満遍なく集めるため、佐野他(1994)によって、親がスキンシップと捉えていることが報告された5つの育児行動群(生活の世話を目的とする育児行動、子どもの身体運動を主とする育児行動、心的接触を主とする育児行動、身体的接触を主とする育児行動、子どもの知的働きを促す育児行動)に含まれる項目の中から、「離乳食を食べさせる」など、主として乳児期になされる育児行動の項目を除いた上で、各群4項目ずつに

なるよう、福武書店教育研究所（1988）、児玉・水原（1992）を参考に、幼児期になされるスキンシップの項目を追加した。質問項目は以下の通りである（下線部は、新たに追加した項目）。

生活の世話を目的とする育児行動：子どもと一緒にご飯を食べる，子どもと一緒に風呂に入る，子どもの身体を拭く，子どもの髪の毛をくしゃ手ぐしでとかす，子どもの身体運動を主とする育児行動：子どもにたかいたかいをする，子どもとくすぐりっこをする，子どもの手を持ってでんぐりがえしをさせる，子どもと一緒にテレビを見る，心的接触を主とする育児行動：子どもをみつめる，子どもと視線を合わせる，子どもに話しかけをする，子どもに歌を歌ってあげる，身体的接触を主とする育児行動：子どもが寝るとき，添い寝や共寝をする，子どもをおんぶする，子どもをひざの上にのせる，子どもをぎゅっと抱きしめる，子どもの知的働きを促す育児行動：子どもに本を読んであげる，子どもと一緒に玩具で遊ぶ，子どもと散歩に出かける，子どもが寝るとき，お話をする。

回答は、「1. まったくしない」，「2. めったにしない（月に1回程度）」，「3. たまにする（週1回程度）」，「4. たびたびする（週3

～5回程度）」，「5. いつもする（ほぼ毎日）」の5段階評定で求めた。

結果と考察

本研究の分析には、SPSS 14.0J for Windows を用いた。

父母別の因子構造 まず、父親と母親でどのような因子構造がみられるか比較するため、父母別に各項目の評定を点数化して（「1. まったくしない」を1点とする）、平均値、標準偏差の値を求め、平均+標準偏差の値が得点範囲を超えた項目については、天井効果が生じていると考えられるため排除した（補助資料A，B参照）。残りの項目（父親17項目，母親10項目）を対象として、それぞれ因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、各項目のうち因子負荷が.40に満たなかった項目を除いて（補助資料A，B参照）、再度因子分析を行った。固有値1以上の基準を設けて、父親4因子，母親3因子が抽出された。プロマックス回転を行った結果の因子パターン、因子間相関、クロンバックの α 係数をTable 1（父親）、Table 2（母親）に示す。

父親の第1因子は、「子どもが寝るとき、お話をする」「子どもに本を読んであげる」など

Table 1 スキンシップの因子分析結果（父親）

質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4
第1因子：静的交流（$\alpha = .84$）				
子どもが寝るとき、お話をする	.92	-.10	-.07	-.04
子どもに本を読んであげる	.78	.01	-.08	-.07
子どもに歌を歌ってあげる	.51	-.06	.29	.01
子どもと一緒に玩具（おもちゃ）で遊ぶ	.51	.12	.14	.11
子どもをぎゅっと抱きしめる	.48	.33	-.04	.06
第2因子：動的交流（$\alpha = .85$）				
子どもにたかいたかいをする	-.05	.91	-.01	-.16
子どもの手を持って、でんぐりがえしをさせる	-.03	.81	-.14	.01
子どもとくすぐりっこをする	.06	.66	.05	.13
子どもをおんぶする	-.05	.64	.22	.08
第3因子：世話（$\alpha = .73$）				
子どもの身体を拭く	.04	.12	.69	-.14
子どもと一緒に風呂に入る	-.12	-.10	.64	.12
子どもが寝るとき、添い寝や共寝をする	.40	-.10	.44	.00
子どもの髪の毛をくしゃ手ぐしでとかす	.25	.11	.42	.02
第4因子：情緒交流（$\alpha = .65$）				
子どもと一緒にテレビを見る	-.25	-.06	.29	.74
子どもをみつめる	.26	.02	-.23	.74
因子間相関				
因子1	—	.65	.55	.49
因子2		—	.62	.47
因子3			—	.47

に対して負荷量が高く、その他の項目との共通項を探すと、時間をかけて子どもにゆっくりとかかわろうとする行動であると考えられたため「静的交流」に関する因子とした。第2因子は「子どもにたかいたかきをする」「子どもの手を持って、でんぐりがえしをさせる」などに対して負荷量が高く、子どもの身体運動機能の育ちに関連する動的かかわりであると考えられたため「動的交流」に関する因子とした。第3因子は「子どもの身体を拭く」「子どもと一緒に風呂に入る」などに対して負荷量が高く、残りの2項目についても、主に入浴前後の世話にかかわる項目であると考えられたため「世話」に関する因子とした。第4因子は「子どもと一緒にテレビを見る」「子どもをみつめる」の2項目からなり、第1因子、第2因子、第3因子を構成する項目に比べると、子どもと直接かかわらない形ではあるが、場の共有、視線の共有によって子どもと交流しようとするかかわりであると考えられたため「情緒交流」に関する因子とした。

母親の第1因子は、「子どもと一緒に玩具（おもちゃ）で遊ぶ」に対して負荷量が高く、その他の項目に関しても、子どもとの遊びの中で出てくるものであると考えられたため「遊び交流」に関する因子とした。第2因子は「子どもが寝るとき、お話をする」に対して負荷量が高く、その他の項目を見ても、子どもにゆっくりとかかわるものであると考えられたため「静的交流」に関する因子とした。第3因子は、父親の第2因子と似ており、子どもの身体運動機

能の育ちに関連する動的かかわりであると考えられたため「動的交流」に関する因子とした。

父親と母親のスキンシップ構造を比較すると、静的交流や動的交流といった共通するかかわり区分がある一方で、「子どもと一緒に風呂に入る」という項目が、父親では世話因子、母親では静的交流因子と異なるところに入っていた。Lamb (1977) は、父親、母親が乳児とかかわる様子を観察し、同じ「抱き上げる」という行動であっても、父親は子どもと遊ぶために抱き上げることが多く、母親は世話を目的で抱き上げることが多いとしている。幼児期においても、父親では世話の一環として一緒にお風呂へ入り、母親ではゆっくりとした交流の一環として一緒にお風呂へ入る、といった具合に、端からみると同じ行動にみえるスキンシップが、異なる目的のもとでなされている可能性が考えられる。

両親の因子構造 次に、父親と母親のスキンシップ量を比較するため、父母のデータを合わせて平均値、標準偏差の値を求め、先の分析と同じ手続きで項目の精選を行い（補助資料C参照）、残った13項目を用いて、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。続いて、各項目のうち因子負荷が.40に満たなかった項目を除き（補助資料C参照）、再度因子分析を行った。固有値1以上の基準を設けて、2因子が抽出された。プロマックス回転を行った結果の因子パターン、因子間相関、クロンバックの α 係数をTable 3に示す。

第1因子は、「子どもに歌を歌ってあげる」

Table 2 スキンシップの因子分析結果（母親）

質問項目	因子1	因子2	因子3
第1因子：遊び交流 ($\alpha = .71$)			
子どもと一緒に玩具（おもちゃ）で遊ぶ	.91	-.09	-.08
子どもに歌を歌ってあげる	.57	.14	.07
子どもとくすぐりっこをする	.47	.02	.10
第2因子：静的交流 ($\alpha = .69$)			
子どもが寝るとき、お話をする	.02	.86	-.05
子どもに本を読んであげる	.16	.57	.02
子どもと一緒に風呂に入る	-.09	.51	.04
第3因子：動的交流 ($\alpha = .66$)			
子どもにたかいたかきをする	.08	-.14	.84
子どもをおんぶする	-.01	.10	.56
子どもの手を持って、でんぐりがえしをさせる	-.09	.29	.42
因子間相関	因子1	因子2	因子3
因子1	—	.47	.48
因子2		—	.44

「子どもに本を読んであげる」「子どもが寝るとき、お話をする」「子どもをぎゅっと抱きしめる」などに対して負荷量が高く、父親の第1因子、母親の第2因子と類似した項目が集まっていると考えられたため「静的交流」に関する因子とした。第2因子は「子どもにたかいたかいはをする」に対して負荷量が高く、その他の項目についても、父親、母親の因子分析でみられた、子どもの身体運動機能の育ちに関連する動的かかわりの項目が集まっていたため「動的交流」に関する因子とした。

因子ごとに項目の粗点を合計して項目数で割ったものを用いて、父親と母親のスキンシップ量を *t* 検定により検討した。その結果、静的交流は、父親よりも母親の方が ($t=9.34, p<.01$)、動的交流は、母親よりも父親の方が ($t=2.03, p<.05$) 多く行っていた。父親と母親における各変数の基礎データを Table 4 に示す。

児玉・水原 (1992) では、父親が遊びを通して子どもとの関係を強めていることが示唆されていたが、本研究において、母親よりも少ない育児時間の中で、特に身体運動をとまなうスキンシップを通して子どもと関係を築こうとする父親の姿を捉えることができた。

調査2では、スキンシップと日常の養育態度との関連の仕方について父母比較を行うため、

父親と母親のデータを合わせて抽出された2因子を用いることとする。

調査2

方法

調査手続き 徳島県内の保育所、幼稚園に通う年中児、年長児の親148組に質問紙調査を行った。質問紙は、調査1と同様に、父親版、母親版をそれぞれ別の封筒へ入れ、互いに相談しないで回答するよう依頼し、記入後は封をして提出できるようにした。質問紙の配布と回収は、保育所、幼稚園に依頼した。父母ともにいずれの質問項目にも欠損値がなかったため、分析は148組のデータを対象に行った。子どもの平均年齢は、5歳6ヶ月 (4.6-6.5; 男児76名, 女児72名) であった。

質問項目 (a) スキンシップ: Table 3の静的交流7項目と動的交流3項目を用いた。回答は、調査1と同じく「1. まったくしない」から「5. いつもする (ほぼ毎日)」の5段階評定で求めた。(b) 受容的養育態度: 鈴木・松田・永田・植村 (1985) から、森下 (2000) が選択している8項目 (例えば、子どものことにじゅうぶん気を配っている) を用いた。評定は、「1. まったくそうではない」から「5. たしかにそうだ」の5段階であった。(c) 積極拒否的養育

Table 3 スキンシップの因子分析結果 (父親と母親)

質問項目	因子1	因子2
第1因子: 静的交流 ($\alpha = .87$)		
子どもに歌を歌ってあげる	.84	-.14
子どもに本を読んであげる	.77	-.07
子どもが寝るとき、お話をする	.72	-.04
子どもをぎゅっと抱きしめる	.71	.09
子どもの髪の毛をくしゃ手ぐしでとかす	.64	.01
子どもと一緒に玩具 (おもちゃ) で遊ぶ	.61	.13
子どもの身体を拭く	.57	.13
第2因子: 動的交流 ($\alpha = .71$)		
子どもにたかいたかいはをする	-.17	.90
子どもの手を持って、でんぐりがえしをさせる	.06	.56
子どもをおんぶする	.31	.52
因子間相関	因子1	因子2
	因子1	—
		.39

Table 4 各変数の基礎統計

	静的交流		動的交流	
	M	SD	M	SD
父親 (n=92)	2.75	.84	2.81	.96
母親 (n=92)	3.81	.70	2.54	.85

態度：品川・品川（1992）から8項目（例えば、子どもをどなりつけることがありますか）を用いた。評定は、「1. ほとんどあてはまる」から「4. ほとんどあてはまらない」の4段階であった。

結果と考察

得点化 まず、スキンシップについて、調査1と同様の構造が再現されるか確かめるため、スキンシップ尺度の10項目を対象に、父母のデータを合わせて因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。固有値1以上の基準を設けて、2因子が抽出され、第1因子には、調査1で静的交流に含まれた7項目が、第2因子には、動的交流に含まれた3項目が入っていた（因子間相関は、.25）。クロンバックの α 係数は、第1因子が $\alpha = .85$ 、第2因子が $\alpha = .68$ であった。調査1と同様の因子構造が再現され、ある程度の内的整合性もみられたため、因子ごとに項目の粗点を合計して項目数で割り、個人得点を算出した。静的交流得点と動的交流得点との相関は、父親では $r = .41$ ($p < .01$)、母親では $r = .33$ ($p < .01$)であった。

また、既存の尺度である受容的養育態度、積

極拒否的養育態度各8項目についても、前者が $\alpha = .87$ 、後者が $\alpha = .79$ と、内的整合性が確認されたため、尺度ごとに項目の粗点を合計して項目数で割り、それぞれ個人得点を算出した。なお、積極拒否的養育態度の粗点については、後の解釈をし易くするため、得点が高くなるほど拒否的となるように、粗点を逆転させて計算を行った。受容的養育態度得点と積極拒否的養育態度得点との相関は、父親では $r = -.47$ ($p < .01$)、母親では $r = -.35$ ($p < .01$)であった。Table 5に、各変数における父親と母親の基礎データを示す。

スキンシップと養育態度との関連 Table 6、Table 7に、スキンシップ得点と養育態度得点との相関を父母別に算出した結果を示す。父親では、受容的である者ほど、静的交流や動的交流を行う傾向がみられ（静的交流 $r = .56$, $p < .01$ ；動的交流 $r = .33$, $p < .01$ ）、この傾向は、母親にも同様にみられた（静的交流 $r = .56$, $p < .01$ ；動的交流 $r = .18$, $p < .05$ ）。また、母親においてのみ、積極拒否的である者ほど、静的交流を行わない傾向が示された（ $r = -.24$, $p < .01$ ）。

Raphael-Leff（1983）は、乳児期における母

Table 5 各変数の基礎統計

	静的交流		動的交流		受容的 養育態度		積極拒否的 養育態度	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
父親 (n = 148)	2.77	.78	2.59	.91	3.78	.74	2.24	.63
母親 (n = 148)	3.77	.67	2.25	.76	4.16	.49	2.29	.44

Table 6 スキンシップと養育態度との相関係数(父親)

	父親スキンシップ	
	静的交流	動的交流
父親養育態度 (n = 148)		
受容的	.56**	.33**
積極拒否的	-.16	-.15

注) ** $p < .01$

Table 7 スキンシップと養育態度との相関係数(母親)

	母親スキンシップ	
	静的交流	動的交流
母親養育態度 (n = 148)		
受容的	.56**	.18*
積極拒否的	-.24**	-.01

注) * $p < .05$ ** $p < .01$

Table 8 父母のスキンシップと養育態度との相関係数 (n = 148)

	父親スキンシップ		父親養育態度	
	静的交流	動的交流	受容的	積極拒否的
母親スキンシップ				
静的交流	.22**	.13	.10	-.15
動的交流	.09	.17*	.01	-.06
母親養育態度				
受容的	.24**	.03	.13	-.22**
積極拒否的	-.22**	-.08	-.28**	.29**

注) * $P < .05$ ** $P < .01$

子のかかわりを調べ、受容的養育態度の母親は、子どもを抱っこしたり、一緒に部屋で寝たりと、子どもとかかわりをもとうとする行動が多いことを報告している。本研究の結果から、父親についても同様の関連がみられ、受容的養育態度は、乳児期に引き続き、子どもとかかわりに関して重要な役割を果たしている可能性が示された。

次に、父母のスキンシップや養育態度は、夫婦間でどのような関係性があるのかを明らかにするため、父母のスキンシップ得点と養育態度得点との相関を算出した。相関分析の結果をTable 8に示す。スキンシップに関しては、父親が静的交流を行うほど、母親も静的交流を行う傾向があり ($r = .22, p < .01$)、また父親が動的交流を行うほど、母親も動的交流を行う傾向があり ($r = .17, p < .05$)、同種類のかかわりにおいてのみ、促進的な関係がみられた。

養育態度については、父親が受容的であるほど、母親が積極拒否的でない傾向があり ($r = -.28, p < .01$)、母親が受容的であるほど、父親が積極拒否的でない傾向があった ($r = -.22, p < .01$)。その一方で、父親が積極拒否的であるほど、母親も積極拒否的であるという傾向も示された ($r = .29, p < .01$)。

菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井 (1999) は、生後11年にわたる縦断研究を行った結果、子どもの問題行動の発達に関する防御因子として、父親の良好な養育態度や母親の父親に対する信頼感や愛情の重要性が示されたとしている。菅原他 (1999) は、この結果をふまえて、育児に奮闘する母親に対して適切なサポートがなければ、時間とともに子どもに対する愛着感にも翳りが出始め、厳しい言動を通して子どもの問題行動を助長するようになる可能性を指摘している。本研究で得られた、父親が受容的であるほど、母親が積極拒否的でないという結果は、こうした知見を支持するものであるとともに、母親が受容的であるほど、父親が積極拒否的でないという結果から、父親についても母親からのサポートが必要である可能性を示唆するものであるといえよう。また、積極拒否的養育態度については、夫婦で促進的な関係がみられた。野崎 (1988) は、児童の父母を対象として養育態度の関連を検討し、父親の養育態度が危険地帯に入っている時には、母親も危険地帯に入っていると報告しているが、本研究の結果は、こうした傾向が既に幼児期からみられることを示

唆するものである。

スキンシップと養育態度との関連については、父親の静的交流と母親の養育態度の間に有意な相関がみられ、父親が静的交流をしているほど、母親が受容的であり ($r = .24, p < .01$)、積極拒否的でない傾向にある ($r = -.22, p < .01$) ことが示された。一方、母親の静的交流、動的交流と父親の養育態度との間には、有意な相関がみられなかった。母親のスキンシップが父親の養育態度と関連せず、父親の動的交流が母親の養育態度と関連しなかった理由として、母親のスキンシップ、父親の動的交流とも、相手側にとっては日常の風景であり、養育態度にかかわるほどの重要性をもたない行動とみなされている可能性が考えられる。その一方で、子どもとかかわる時間の短い父親が、静的交流でゆっくり子どもと接している姿は、母親にとって印象的にうつり、母親の養育態度にまでかかわってくるのかもしれない。

総合考察

本研究では、幼児期になされるスキンシップの様相を明らかにするため、まず、父母のスキンシップの構造や量に関する比較を行った。父親と母親のスキンシップ構造を比較したところ、静的交流や動的交流といった共通因子がみられる一方で、父親と母親で同じ行動が異なる因子に入っていることが示された。ここから、父親と母親のスキンシップに関しては、行動レベルでは同じであっても、そのスキンシップをどのような目的でしているかが異なるものがある可能性が考えられた。スキンシップの量に関しては、父親よりも母親の方が静的交流を、母親よりも父親の方が動的交流を多くしているという結果が示され、子どもと動的交流を通して関係を築こうとする父親の姿が浮き彫りにされた。

次に、調査1で父母のデータを合わせて作成した尺度を用いて、スキンシップと日常の養育態度との関連を検討した。その結果、静的交流、動的交流にかかわらず、父母ともにスキンシップと受容的養育態度との間に関連がみられた。従来の研究において、受容的養育態度の重要性は繰り返し指摘されてきているが、親子間のスキンシップを指標にすることで、父親や母親の養育態度に関する新たな支援方法が見いだされる可能性があるだろう。

最後に、スキンシップと養育態度について、

夫婦間でどのような関係性がみられるかを検討した。スキンシップに関しては、同種類のかかわりにおいてのみ促進的な関係がみられ、更に、父親の静的交流が母親の養育態度に関連していた。このことから、幼児期におけるスキンシップは、子どもに対してなされている一方で、夫婦間において、相手が子どもに対して行うスキンシップや養育態度にまで影響するものであることが示唆される。

本研究では、父親の静的交流のみが母親の養育態度と関連していたという結果について、時間をかけて子どもにゆっくりとかかわろうとする父親の姿が母親の良好な養育態度に影響を及ぼしているのか、それとも母親の良好な養育態度が父親のゆったりとしたかかわりにつながっているのか、その方向性までふみこんだ考察ができなかった。しかし、この結果は、父親が限られた時間の中で育児をする際、どのように子どもとかかわり、関係性を築いていけば良いか、更に、夫婦でどのように育児を進めていけば良いかを考える一つの手がかりにはなるだろう。また、今回は父母比較を中心に検討を行ったため、実際、スキンシップが子どもにどのような影響をもたらしているか、また子どもの性によってその影響の仕方が異なるかについては検討の余地が残されている。今後は、幼児期におけるスキンシップのあり方に関して更に知見を深めるため、父母のスキンシップと子どもの発達との関連について検討を進める必要があるだろう。

引用文献

- 福武書店教育研究所 1988 モノグラフ・小学生ナウ スキンシップ 福武書店
- 平井信義 1976 母性愛の研究 同文書院 P. 31.
- 加藤邦子・近藤清美 2007 3歳児における父子と母子の遊びタイプの比較 発達心理学研究, **18**, 35-44.
- 児玉典子・水原敏子 1992 幼児期と児童期の子どもに対する父親と母親の養育行動 滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学, **42**, 47-62.
- Lamb, M.E. 1977 Father-infant and mother-infant interaction in the first year of life. *Child Development*, **48**, 167-181.
- 森下正康 2000 幼児期の自己制御機能の発達 (1) : 思いやり, 攻撃性, 親子関係との関

連 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, **50**, 9-24.

- 森下正康 2001 幼児期の自己制御機能の発達 (3) : 父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与えるか 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, **11**, 87-100.
- 野崎康明 1988 親の養育態度が子どもに及ぼす影響 総合文化研究所紀要, **5**, 52-64.
- Raphael-Leff, J. 1983 Facilitators and Regulators : Two approaches to mothering. *British Journal of Medical Psychology*, **56**, 379-390.
- 佐野良五郎・荻野七重・鈴木五三男 1994 母子交流に関する研究 : スキンシップについて 小児保健研究, **53**, 425-431.
- 品川不二郎 1992 親としての欠点を自分で見つけるには 品川不二郎・品川孝子 あなたはよい親? よくない親? 田研出版 Pp. 1-111.
- 品川不二郎・品川孝子 1992 TK式幼児用親子関係検査 田研出版
- 総務省統計局 平成18年 社会生活基本調査結果の概要 調査票Bに関する結果 P. 6 (2008年2月12日) <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/pdf/gaiyou3.pdf>
- 菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島 悟・佐藤達哉・向井隆代 1999 子どもの問題行動の発達 : Externalizingな問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から 発達心理学研究, **10**, 32-45.
- 鈴木真雄・松田 惺・永田忠夫・植村勝彦 1985 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家庭環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), **34**, 139-152.
- 田中良子 1997 スキンシップ概念の検討 : 和製英語の導入と定着 高松大学紀要, **27**, 502-516.
- 塚崎京子・無藤 隆 2004 保育者と子どものスキンシップと両者の人間関係との関連 : 3歳児クラスの観察から 保育学研究, **42**, 42-50.
- 山口 創・山本晴義・春木 豊 2000 両親から受けた身体接触と心理的不適応との関連 健康心理学研究, **13**, 19-28.

付 記

本論文は、第二著者が鳴門教育大学に提出し

た修士論文「親子のスキンシップと幼児の攻撃性に関する研究」の一部について再分析し、加筆修正したものです。調査にご協力くださいましたご家族の皆様、園の先生方に心から感謝いたします。また、本論文の作成にあたり、ご指導、ご助言いただきました広島大学大学院 樋口匡貴先生に深く感謝いたします。

補助資料A

各項目における平均値、標準偏差の値（父親）

質問項目	M	SD
因子分析に用いた項目		
子どもと一緒に風呂に入る	3.86	1.05
子どもの身体を拭く	3.18	1.21
子どもの髪の毛をくしゃ手ぐしでとかす	2.53	1.25
子どもにたかいたかひをする	2.82	1.20
子どもとくすぐりっこをする	3.33	1.01
子どもの手を持って、でんぐりがえしをさせる	2.64	1.04
子どもと一緒にテレビを見る	4.05	0.91
子どもをみつめる	3.96	1.01
子どもに歌を歌ってあげる	2.38	1.22
子どもが寝るとき、添い寝や共寝をする	3.40	1.42
子どもをおんぶする	2.97	1.15
子どもをぎゅっと抱きしめる	3.17	1.24
子どもに本を読んであげる	2.38	1.04
子どもと一緒に玩具（おもちゃ）で遊ぶ	3.11	1.04
子どもが寝るとき、お話をする	2.47	1.16
(因子負荷が.40に満たなかったため途中で削除された項目)		
子どもをひざの上にのせる	3.73	1.11
子どもと散歩にでかける	2.86	1.01
天井効果が生じているため削除した項目		
子どもと一緒にご飯を食べる	4.40	0.81
子どもと視線を合わせる	4.26	0.90
子どもに話しかけをする	4.52	0.75

補助資料B

各項目における平均値、標準偏差の値（母親）

質問項目	M	SD
因子分析に用いた項目		
子どもと一緒に風呂に入る	3.93	1.00
子どもにたかいたかひをする	2.02	1.06
子どもとくすぐりっこをする	3.62	0.95
子どもの手を持って、でんぐりがえしをさせる	2.36	1.07
子どもに歌を歌ってあげる	3.93	0.86
子どもをおんぶする	3.23	1.20
子どもに本を読んであげる	3.48	1.05
子どもと一緒に玩具（おもちゃ）で遊ぶ	3.62	0.94
子どもが寝るとき、お話をする	3.52	1.26
(因子負荷が.40に満たなかったため途中で削除された項目)		
子どもと散歩にでかける	3.12	1.03
天井効果が生じているため削除した項目		
子どもと一緒にご飯を食べる	4.95	0.27
子どもの身体を拭く	3.99	1.11
子どもの髪の毛をくしゃ手ぐしでとかす	3.90	1.38
子どもと一緒にテレビを見る	4.55	0.65
子どもをみつめる	4.70	0.62
子どもと視線を合わせる	4.75	0.59
子どもに話しかけをする	4.92	0.34
子どもが寝るとき、添い寝や共寝をする	4.38	1.04
子どもをひざの上にのせる	4.25	0.89
子どもをぎゅっと抱きしめる	4.24	0.92

補助資料C

各項目における平均値、標準偏差の値（父親と母親）

質問項目	M	SD
因子分析に用いた項目		
子どもの身体を拭く	3.59	1.23
子どもの髪の毛をくしゃ手ぐしでとかす	3.22	1.49
子どもにたかいたかひをする	2.42	1.20
子どもの手を持って、でんぐりがえしをさせる	2.50	1.06
子どもに歌を歌ってあげる	3.16	1.31
子どもをおんぶする	3.10	1.18
子どもをぎゅっと抱きしめる	3.71	1.21
子どもに本を読んであげる	2.93	1.18
子どもと一緒に玩具（おもちゃ）で遊ぶ	3.36	1.02
子どもが寝るとき、お話をする	2.99	1.32
(因子負荷が.40に満たなかったため途中で削除された項目)		
子どもと一緒に風呂に入る	3.90	1.03
子どもとくすぐりっこをする	3.47	0.99
子どもと散歩にでかける	2.99	1.02
天井効果が生じているため削除した項目		
子どもと一緒にご飯を食べる	4.67	0.66
子どもと一緒にテレビを見る	4.30	0.83
子どもをみつめる	4.33	0.91
子どもと視線を合わせる	4.51	0.80
子どもに話しかけをする	4.72	0.61
子どもが寝るとき、添い寝や共寝をする	3.89	1.33
子どもをひざの上にのせる	3.99	1.04